

大衆藝術

鶴見俊輔 著

河出新書

32

鶴見 俊輔

哲學評論家，葛飾區金町2の802掛川
方，大正11年東京生，ハーバード大學
卒，東京工大教授，思想の科學研究會
員，主著「哲學の反省」「哲學論」「ア
メリカ哲學」

、大衆藝術

河出新書

昭和29年3月5日 第1刷發行

¥ 80

著者 ^{つる}鶴 ^み見 ^{しゆん}俊 ^{すけ}輔

東京都千代田區神田小川町3-8

發行者 河出孝雄

東京都文京區柳町26

印刷者 山元正宜



發行所 東京都千代田區 株式會社 河出書房
神田小川町3-8

落丁本・亂丁本はお取替えいたします

大衆藝術



鶴見俊輔 著

河出新書

裝
幀

庫
田

發

目次

I 通路の批評

映畫と現代思想	六
ラジオ文化	一八
物語漫畫の歴史	二八
戦後小説の形	五二
大衆小説について	七四
生花の位置	八五
らくがきと綴り方	九二
サークル詩	一〇八
大衆藝術の研究	一二八

II 作品の批評

まげ物の復活	一三六
殺し技法の低さ	一三八
見る雑誌の登場	一三〇
笠置シズ子の意味	一三四
漫才の思想	一三六
日本語の問題	一三八
勅語・かるた・じゃんけん	一四一
かるたの官僚化	一四四
民話劇集について	一四七
一つの日本映畫論	一四九
参考文献	一七一
あとがき	一七三

通路の批評

映畫と現代思想

一

現代の思想家は、ほとんどみな、時代にとりのこされつゝあるのではないか。

現代の思想家は、現代の大衆の思想問題ととりくむために必要な訓練を、缺いているのではないか。

僕自身、これまで受けて來た訓練を ふりかえつて見て、自分に、果して、現代の思想問題ととりくむ資格が、あるかどうかと、うたがっている。

僕は、文字本位の訓練を 受けて來た。亂讀ということ、子供の頃の朝夕を、過した。活字に目を さらすということ——それだけが、自分の思索を きたえる唯一の手段だと考えて、

この手段だけにたよつて自分の思索力を 養つて來た。

自分の目で、はつきり物事を見るということ。それが、そのまゝ、思索を 高めるきつかけになると、考えたことがなかった。音を 耳がきくということ。その能力も、自分の思索力と、結びつけて考えてみたことは、なかった。繪を 描くという能力も、子供の頃にはあつたのだが、その後、僕が「思想」というものに興味を 持つようになってから、失われてしまつた。

物を見る。音を きく。形を えがく。そういうことは、「思想」ということのためには、縁のないものとして、捨てゝしまった。そして、活字だけを 追っかけて行くことによつて、思想家になろうとした。

現在 綜合雜誌に書いている思想家たち、大學で講義している思想家たちの場合も、だいたい同様だ。彼等の思索は活字本位だ。

しかし、それで、彼等は、今、人類が通り抜けつゝある思索を 自分のものとして正しく経験しつゝあるか。人類の思想史的状況を、正しく診斷することが、彼等にできるだろうか。よしや、正しく診斷したとしても、人類の思想史的状況を 効果的に處理することが、彼等にできるかどうか。

それらのことに、僕の、うたがいを持つ。

くりかえして言えば、現代の世界で、“思想”を クイモノにしている人達は、活字本位の思想訓練を経たものであるのに反して、それらの人々以外の一般大衆は、活字本位でない思想的訓練を受けて来たのであるということだ。

職業的思想家と、一般大衆との間のズレが、いろいろの困難を生み出すことはないか。そういうことは、なるほど、今までにもあったことだ。この困難自身は、新しいものでない。人類の歴史と共にあった、昔ながらの困難である。活字印刷術の發明、初等教育の普及以前の諸世紀においては、この困難の、分別もはるかに大きかった。

しかし、二十世紀のなかばに立っている人類にとつては、この困難は、少なくとも前世紀、あるいは前々世紀よりひどくなっているのではないか。

二

なぜ、そんなことを 言うのかといえは、僕は、映畫とラジオと漫畫のことを 考えているのだ。

さらに、もう一步さきばしりして、テレヴィジョンのことまで考えている。テレヴィジョンは、映畫とラジオと漫畫を 打って一丸となしたような役割を 努めるであろう。それは、日本には、まだ縁が遠いけれども、アメリカでは、二百弗以内で手に入る。アメリカの市民が各

家庭にもつている自動車よりも、はるかに安い。これが、ラジオと同じくらい、廣く普及する日は、今世紀の中には、来るであろう。

こういうものは、大衆の思索を かえないか。勿論、かえる。現に、(テレビジョンなどなくとも) ラジオや映画や漫画の普及だけでも、大衆の思索の型を、今までとちがったものにしたと思う。

アメリカと日本とを、くらべてみよう。

アメリカでは、定期的な新聞の読者は、國民の八〇%。定期的なラジオの聴取者は、國民の九〇%。定期的な映画観客は、國民の七〇%だ。定期的なテレビジョンの観客は、國民の一〇%だ。

日本では、新聞の読者は、國民の二五%。ラジオ聴取者は、國民の一五%。映画観客は、國民の三%だ。

繪で示すと次のようになる。たゞし、●ひとつが、うけとり手一〇%をあらわす。○ひとつが、きいていない人一〇%をあらわす。

右によつて、アメリカよりも貧乏な國である日本が、はるかにおくれた段階にあることも分るし、日本が、どういう方向にむかつて進むかということも、アメリカの例にならつて解し得よう。また、以上のようにはつきりとちがうマス・コミュニケーションの發達狀況が、それぞれ

マス・コミュニケーションの影繪

アメリカ	新	聞	●	●	●	●	●	●	●	●	○	○
	ラ	ジ	オ	●	●	●	●	●	●	●	●	○
	映	畫	●	●	●	●	●	●	●	○	○	○
	テレヴィジョン		●	○	○	○	○	○	○	○	○	○
日本	新	聞	●	●	◐	○	○	○	○	○	○	○
	ラ	ジ	オ	●	◐	○	○	○	○	○	○	○
	映	畫	◐	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	テレヴィジョン		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○

れの國における大衆の思索に對して、ことなつた種類の制約となつてゐることも考え得る。これは、アメリカ大衆と日本大衆との思索の型の相違ともなつてゐると思う。

以上の他に、もう一つの因子が、マス・コミュニケーションの上に、加わるはずである。テレヴィジョンである。これは、ラジオと同じくらい廣く用ゐられるようになると思うが、その役割はどうかと言うと、テレヴィジョンは、ラジオにのつて、ラジオの場所に映畫をすえるものと言える。これまで、

19世紀 (1850年の アメリカ)	新	聞	●	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	ラジ	オ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	映	畫	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	テレビジョン		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
20世紀 (1950年の アメリカ)	新	聞	●	●	●	●	●	●	●	●	○	○	○	○
	ラジ	オ	●	●	●	●	●	●	●	●	●	○	○	○
	映	畫	●	●	●	●	●	●	●	○	○	○	○	○
	テレビジョン		●	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
21世紀 (2050年の アメリカ)	新	聞	●	●	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	ラジ	オ	●	●	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	映	畫	●	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	テレビジョン		●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	○	○

わざわざ劇場まで行くのが面倒で映画を見なかった人が、今や、テレビジョンによつて自分の部屋でいながらにして映画を見ることが出来る。同時にテレビジョンは色もあり、形もあつて面白い故に、ラジオをしのいでしまい、それを魅力なきものとする。

このように、テレビジョンが普及するという状態は、實は、映画というコミュニケーションの様式が、本當に廣く、マス・コミュニケーション様式として確立されることだと考えてよい。かくて映画は、明日の大衆の思

索の上に、今まで以上の強大な力をふるうこととなる。

さて、二十世紀末におけるマス・コミュニケーションの状況を、架空に考えてみて、影繪で示すことにする。更に、つい昨日であつた十九世紀の噂話におけるコミュニケーションの状況を、やはり、影繪で示してみよう。（十九世紀には、演劇観客が映畫観客の代りの線をつとめたわけだが、これは、二十世紀にもあることだから省く。）

以上によつて、一世紀とびこしただけでも、大衆の思索を 制約するものとしてのマス・コミュニケーションのイガタが根本的に加わるということが、納得できるだろう。

映畫的な要素は、大衆の思想の上に、ますます重大な役割を つとめるようになって行く。

三

そういう今世紀の變化に對應して、思想家もまた、自己の武裝を新しくしなければならぬ。そうでなければ、やがては大衆と縁なきものになってしまう。いや既に、そうなりつゝあるではないか。

殊に、日本の思想家について、言うならば、日本の進歩的思想家の間には、一種の抜きがたい「進歩への信仰」がある。このために、人類の進歩が、きわめて容易に、時がたちさえすれば、必然的にもたらされるものと信じようとする。人類の進歩について「悲觀的」なことを

言つたとすると、それだけでもすでに、「社會に反する罪」であるかのように責任をとられる。この論法で行くと、人類は、映画の普及により、またテレビジョンの普及によつて、ますますその思索を 高め、より高次の文明の段階へと、必然的に上つて行くのである。

しかし、僕には、そんなにやすく、今後の進歩が行われるものと信じられない。

原子爆弾が、人類の手にあつて、今、善用されるとも、悪用されるとも斷定できぬ状態にあると同じく、二十世紀の新しいマス・コミュニケーションの道具もまた、きわめて不安定な状態にあると思う。歴史上の偉大な先人は、こういう新しい發明に出會つた時に、その發明が人類の進歩に役立つだろうと手ばなしで樂觀し満足しているのではなく、様々の困難を 豫見してそれらと取りくんだのであつた。

映画およびテレビジョンの普及は、いかなる困難を、人類の思想史の上にもたらすであらうか。そのことを、我々が、今、考えてみなくてはならない。困難が痛切に感じられた時にのみ、これを 切り開こうという實踐的意欲が生れるのだから。

① 思索力（象徵化の能力）が低くなること。

映画やテレビジョンは、大衆の側で少しも努力しなくても、らくらくと心に入つて来る。それに、映画やテレビジョンは、出來事がそのまま冷凍されて、大衆の心につたわるから、

活字によつてつたわる場合の如く一度抽象された上で大衆自身によつて具體化されて把握されるという形をとらない場合が多い。したがつて、記號作用としては、より原始的な、より簡單なものにもどつてしまう。高度に抽象化された、複雑な思想は、得られにくくなる。

② 思索が自發的でなくなり、より大きな統制を受けるようになる。活字によつて思想がつたえられる場合には、読み手は、その本を 讀むスピードを 勝手に調節することができ、したがつて書かれてあることについて吟味しながら讀むことも、できやすい。しかし、映畫やテレビジョンにあつては、向うから一方的に或速度で思想が流れこんで來るので、それについて吟味することがしにくい。

③ 社會において權力を 持たぬ少數者團體の意見は、大衆につたわらない。活字の時代には、少數者といえども、何千軒もある出版社の一つを動かせば、意見を 大衆に發表できた。たゞ一人で、自分の書いた本を 自費出版することさえできた。しかし、テレビジョンの時代には、そんなことは不可能になる。大衆むけのテレビジョン放送の上に、或人が自分の意見をのせるためには、（現在のアメリカのラジオ放送制度を 標準とすれば）夜の一時間に對して一七、五七〇ドル支拂わなければならない。だから、たくさんの金を 拂っている會社や黨派の意見だけが、いつも大衆にむかつて放送されることになる。獨立した放送局があつて、少數者集團の聲を 代表したとしても、その放送には金がかゝつていなくて貧弱なものだから、やが

てはきかなくなる。現在アメリカには、非常にたくさんの高級な獨立放送局があり、アイオワ大學放送局、ウィスコンシン大學放送局、ミネソタ大學放送局、ミシガン大學放送局などは、優秀な番組をおくっているのだが、アメリカ大衆の大部分は、毎日自發的にラジオにスイッチを入れ、自由意志によつて自分のきくものを選んでるのである。これら大學放送局の存在することすら知らないのだ。新聞界におけるクリスティアン・サイエンス・モニター紙やニューヨーク・タイムズ紙にあたるほどの影響力を有する良心的放送局の出現は、期待できない。テレヴィジョンの場合にも、同様であらう。

④ 自我の意識が、だん／＼弱まつて来る。映畫を見てゐる時の方が、本を讀んでゐる時よりも、對象と自己の區別がアイマイになっている。活字は本來、人と人とを極めてゆるゆると結びつける役割をして來た。しかし、活字にかわつて映畫が、(テレヴィジョンによつて)人々を結びつける主なる手段となるならば、人と人との結びつき方は、この數世紀における方式とまつたくちがつたものとなる。人と人とは、もつときつちりと結び合わされ、自我の意識は、薄くなろう。したがつて、自我意識の上に組みたてられた様々の思索は、改築されるか、あるいはトリコワシの運命にあうであらう。

さて、以上の困難に對して、我々が現在の思索のレベルを守り、これらの困難を逆に使